

I—A—1 てんかん患者の聴性脳幹反応について

慈恵医大 精神神経科

大石雅之[○]・田村 元・野中和俊・井上栄吉・中川茂昭
中山和彦・佐藤譲二・森 温理

てんかん発作の発現機序については、脳幹部の関与が大きく、全汎性強直-間代発作や欠伸発作では、皮質と脳幹の interaction が注目されている。そこで、聴性脳幹反応 (ABR) を用いて、てんかん患者における脳幹部の機能的、器質的障害の程度を検討した。

(対象)

対象は20才～49才までの男子30名、女子17名、正常コントロールは、男子8名、女子15名であった。対象を発作型で分類すると、PGE、男子15名、女子11名、SGF、女子1名、SPE、男子9名、女子1名、CPE、男子6名、女子4名である。

(方法)

方法は、両耳刺激ABR、右側刺激ABR、左側刺激ABRを行ない、波型潜時、頂点間潜時、振幅を測定した。

(結果)

両耳刺激による頂点間潜時をみると、I—IIIでは、男子コントロール群と、男子PGE、SPE、CPEとで有意な差は認めず、また女子コントロール群と女子PGE、CPEとでも、有意な差は認めなかった。I—Vでは、男子コントロール群と、男子PGE、SPE、CPEを比較して、男子PGEでは、やや潜時の延長する傾向をみたが、SPE、CPEでは差はみられなかった。同様に、女子コントロール群と女子PGE、CPEとで比較したが、差は認めなかった。両側刺激の振幅をI/V比、III/V比でみると、男子コントロール群と、男子PGE、SPEとでは差はなかったが、CPEでは低い傾向がみられた。女子においても、コントロール群とPGEとでは差がなかったが、CPEとでは男子と同様に低値を示した。また波型潜時等についても検討しており、さらに症例を増やして、経過年数、服薬状況、脳波所見等も考慮に入れて、報告する。

I—A—2 小児痙攣性疾患における Ambulatory EEG monitoring system の臨床応用 ～特に発作時記録を中心に～

富山医科薬科大学 小児科
同 検査部^{*}

小西 徹、村上 美也子、山谷 美和、
紺田 応子、岡田 敏夫、
奥田 忠行^{*}

目的：痙攣性疾患においては、発作時脳波記録を行うことは診断上重要なことである。通常脳波記録 (R/EEG) では、発作に遭遇する機会は少く、長時間脳波記録が必要となることが多い。今回我々は、外来でも手軽に使用可能な Ambulatory EEG monitoring system (A/EEG) を診断に苦慮した症例に施行し、その有効性、臨床応用について検討した。

方法、対象：A/EEGにはMedidata M-300を使用した。対象は非定型的な発作を有する27名(4ヶ月～15歳)であり、R/EEGによる臨床発作型は、CPS 11名、SPS 3名、GTC 3名、その他のてんかん5名、不明5名である。記録時間は24時間で、外来における日常生活下の記録を原則とした。再生した脳波に対し発作時記録、間歇期発波の分布の検討と、一部の症例では基礎波の検討の為F.F.T.を行った。

結果：27名に対し計684時間の脳波記録を行った。全記録中、てんかん発作を思わせる episode (家人の観察) は18名/27名(67%)に認め、21種類87回の episode を収録することができた。これはR/EEGで遭遇した発作(6名、6回)に比して明らかに高率であった。episode は1)運動発作10、2)意識消失又は混濁5、3)自律神経症状3、4)その他、知覚異常2、笑い発作1であった。A/EEGの発作時記録において13/21がてんかん性発作波を示しててんかん発作と確認できた。8/21はてんかん以外の episode が示唆された。発作間歇期A/EEGでは全汎性発作波又は sp& w burst の確認は容易であったが、焦点発作(単発)の検出はR/EEGに比し苦慮することが多かった。

結論：本法の利点は1)幼児期でも使用可能2)日常生活下での自然状態の記録3)発作時記録の機会が多い4)発作波の circadian cycle の検討が可能 など多く、今後小児科領域でも広く使用できるものと思われる。